



佐賀県立大学ニュース

学長予定者 山口 和範 教授インタビュー



令和11年4月の開学に向けて準備を進めている佐賀県立大学(仮称)について、学長予定者の山口 和範教授(立教大学)に、話を聞きました。

佐賀で過ごした子ども時代の話しや、 学びを意識したきっかけを聞かせてください。

生まれ育ったのは佐賀市富士町の北山ダムの近くです。山で遊んだり、川で魚を釣ったり、自然の中でいろんな工夫をしながら遊んでいました。勉強に関しては近くに塾もないので、学校で勉強するだけ。親からは「うちは農家じゃないから跡を継ぐような土地もないし、勉強して自分で仕事ができるようにならないといけない」と言われた記憶がありますね。

ちなみに、小学校は片道3kmを歩いて通い、中学校は自転車でしたが片道8kmの通学に剣道もやっていたので、自然と体が鍛えられました。当時は意識していませんでしたが、これまで健康に過ごしてきた礎になっていると思うので、子どもの頃に走り回って遊ぶことは大切ですね。

学ぶことについて意識したのは、高校に行ってからです。進学先は佐賀西高校で、佐賀城近くに下宿をしていました。下宿先には友達が来ることも多く、夜中にいろんなことを議論していた記憶があります。田舎で育った自分にとって、佐賀市中心部はすごく都会で、そこに住む同級生たちの考え方は自分と違っていて刺激になりました。

とくに影響を受けたのが、一年生の時に担任だった数学の先生です。先生との出会いで自分が数学に向いていることに気づき、大学も理学部数学科に進みました。学ぶことが、こんなにも楽しいんだと気づけたことが、自分にとってすごく大きかったです。とにかく小さい頃から遊びも勉強も、自分が楽しいと思うことや好きなことだけをやってきた人間だったので(笑)。研究者の道に進んだのも、好きなことをしたいという気持ちからでした。

佐賀とは、これまでどんな関わりをもってこられましたか。

専門が統計学なので、県や市の職員向けに統計分析の講義を行ったり、高校で出前授業を行うなど、佐賀には定期的に通っていました。プライベートではスポーツが好きで、とくにサガン鳥栖はドリームパスポートを持っているほどで、ホームゲームはできるだけ観戦するようにしています。佐賀はサッカーだけでなく、バスケットボールやバレーボールなどもあり、トップのプロスポーツの試合が楽しめる素晴らしい環境です。スポーツ好きの教え子(立教大学の学生)も一緒に来ることもあり、佐賀の美味しいものを食べさせたり、温泉やいろんな所に連れて行ったりしています。



教え子の学生とのサガン鳥栖の試合観戦の様子



教え子の学生との佐賀旅行の様子(太良町の牡蠣小屋)

県立大学が目指す姿、学びの特色を教えてください。

目指しているのは学生だけでなく、県民の皆さんと一緒に佐賀県全体が成長している大学です。そのために大切なのは、大学が閉じられた場所ではなく、地域とつながる開かれた場所になること。実は、県立大学構想を初めて聞いたとき、「18歳人口が減るなかで大学を創るってどういうことなの?」と私自身も思いました。ただ、2026年に「武雄アジア大学」が開設されるとしても、佐賀県の四年制大学は3校と全国的にみてもまだまだ少なく、県にとっては大きな損失だと思っています。大学は学生を育てるだけの機関ではなく、地域に影響を与えるさまざまな機能を持っているからです。だからこそ県立大学は、学生だけでなく地域の人たちにも、いろんな形で利用してもらいたいと考えています。県全体をキャンパスと考えて、学びのフィールドを広げていくことが、県立大学の成功につながると思っています。

県立大学の学びの特色は、自ら課題を発見し、解決方法を考える実践的な課題解決型学習(PBL: Project Based Learning)です。つまり、大学で得た知識や経験を地域社会等でどう活用していくかということ。プロジェクトを実践するには、さまざまな人々と協働することが必要で、「一緒にやろう!」とか「なるほど!」と思ってもらえる人間力や共感性が求められます。それは、教室だけで学んで身につくものではありません。地域に溶け込み、いろんな人々と触れ合って、コミュニケーションをとることが大切です。学生だけでなく、関係する人々と一緒に課題解決にチャレンジできる大学にしたいと思っています。

県立大学で育成する「チェンジ・メーカー」とは、どんな人物像ですか。

チャレンジし続けて周囲に変革をもたらし、未来を切り拓く人材です。その背景には今現在、日本経済が停滞期を迎えており、状況を変えるには若い人たちが変化を恐れず、いろんなことにチャレンジする必要があるからです。実は、「目の前のことに対応できればいい」、「心地いいから今のままでいい」と考える若い人たちがとても多いんです。そういう教育をしてきてしまった大人の問題かもしれませんが、「これでいい」と思った段階で進歩はありません。現状を変え、世の中を進歩させるには、未来を切り拓いていくチェンジ・メーカーが生まれる大学でなければいけません。

県立大学の卒業生には、どのように活躍してほしいですか。

一番大切なのは、大学に進学することで若い人たちの可能性が広がることです。佐賀県内はもちろん、さまざまな場所や分野で活躍してもらいたいと思っています。佐賀県で活躍する卒業生が増えることで県が活性化します。そのような選択をする学生が多くなるように、佐賀で働くこと、佐賀で暮らすことをイメージできるようなカリキュラムにしていきたいです。

そもそも、そんな若い人たちが県立大学に入ってきてくれること自体が、県全体の発展につながると思っています。県立大学の学生になるということは、少なくとも4年間は佐賀にいるということ。つまり、将来世界でも活躍できるような人材が、その期間はいろんな形で佐賀に貢献してくれることになります。

高校との連携を重視されると聞きましたが。

県立大学の課題解決型学習と、生徒自身が課題を設定し、解決していくことを目的とした高校の探究学習を軸に、県内の高校との連携を進めていきたいです。残念ながら今の高校は、進学校を中心に受験のための学びになっている面もあります。大学に入ることがゴールではないと社会の価値観が変わっていけばいいなと思っています。

高校との連携は、具体的には、高校生に年齢の近い大学生と一緒に何かをやってもらうイメージ。直接話を聞きながら、高校生には「1年後、2年後、こんなふうに自分もなれるんだ!」っていうのを感じ取ってもらいたい。大学の教員よりも、年齢が近い大学生が話してくれる方が成長モデルとしてのイメージが付きやすいと思います。

高校はもちろんですが、小・中学生の段階からうまく大学と連携できれば、将来的に人として成長できる意味のある学びにつながっていくと思っています。

キャンパスはどこになるんですか？

SAGAアリーナ近くにキャンパスを開設しますが、そこに閉じこめるのではなく、県内各地にベースキャンプを設けて、県全体を学びのフィールドにします。ベースキャンプの場所は常設ではなく、学習テーマや地域に応じて随時変更します。例えば、公民館や学校の空き教室、空き家など、色々なところを利用させてもらいたい。地域によっては宿舎などしながら、交流やディスカッションし、そこで過ごしたからこそ見えてくる課題もあるし、地域の人から出された課題にチャレンジするのもいい。学生のためでもあるけれど、地域のためにもならなければ県立大学の意味がないと思っています。

社会人の学び直しの場としては、どうお考えですか。

個人的には、大学は何回行ってもいいと思っています。18～22歳の4年間で学びが終わるわけではありません。学びはずっと続いていくし、新しいことを学びたいと思うかもしれません。「10年に1回くらい大学生になってみませんか?」みたいなことを言いたいし、今後は色んな大学がそうになっていくんじゃないかと思っています。

農業や漁業、林業などを始め、様々な分野に携わる方々に、専門技術を磨く学校だけでなく、ビジネスや経営などを学ぶために大学に通うことも選択肢に入れてほしい。ただし、社会人が4年間大学に通うのは現実的に無理です。年齢や職業に関係なく学べるようにするには、4年間通わなくてもいい仕組みづくりが必要で、時々大学生になってもらったり、当事者としてPBLに関わってもらったり、大学を普段使いしてもらえるようにしていきたい。長い人生だからこそ、自分のタイミングで学びに行けるのが理想的といえます。欲を言えば、公開講座など1回だけの授業を受けるというより、もうちょっと本格的に勉強してもらえたら嬉しいです。大学は学ぶだけでなく人と人をつなぐ場でもあるので、現役の若い学生たちと交流できるのも意味があることだと思っています。

最後に、県民の皆さまに一言お願いします。

県立大学を、地域に愛され、ともに成長する大学にしていきたいです。閉ざされたキャンパスではなく、地域に開かれたキャンパスを目指しているからこそ、学生や教員、職員を含め、地域の方々と対話が大切だと思っています。お互いに感じていること、考えていることを話すことで、地域解決などの新たな気づきが生まれるかもしれません。県民の皆さんに、「県立大学に通うわけでもないし、自分には関係ない」という風に思われないように頑張っていきます。まずは、キャンパスやベースキャンプにも来てほしい。県民の皆さん全員に、県立大学となんらかの関わりを持ってもらえたら嬉しいです。



県立大学が県民の皆さんに認められる目安の一つが、「キャンパスに行ってみたい!」と思われるかどうかです。メインキャンパスは、佐賀駅から徒歩圏内で、SAGAアリーナの近く。SAGAアリーナでのイベントの行き帰りに歩く途中で、ふらっと立ち寄ってもらえるようなキャンパスにしたいと考えています。

自分たちも新しい大学づくりに関わっている、一緒に創っているんだと思っていたことが大切だと思います。ぜひ、みなさん様々なご意見をお寄せください。

【プロフィール】

1962年佐賀市富士町生まれ。1990年から立教大学で教員を務め、経営学部長、副総長を歴任。専門は統計学、データサイエンス。2024年から県立大学の検討に関する専門家チームのリーダーを務める。県立大学学長予定者。